

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、語、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題としてみてください。会話が広がります。

令和7年10月17日(金)

みんなの居場所

【雑】相手の心を想像して

人付き合いといふものはとても難しい。個人のパーソナリティがぶつかり合うことから軋轢が生じ、思わぬトラブルが発生するからだ。出来るならその様なトラブルは避けていきたい。では、そんな時どうすればよいのだろうか。一言で結論を出すなら「相手の気持ちを想像して言動を律する」とである。

個人は社会生活を送る中で、個別に与えられた仕事があるため、基本的にはそれを優先して行動する。しかし、企業や学校は組織として活動しているので、個人主義は軋轢の基となる。本来、個別の仕事であっても組織の中の幾つもの個が支え合って、個別の仕事が成り立っているのだ。これまでの経験から、前述の個人主義を感じられる人は、自身自身の個人主義的な振る舞いに気が付いていないことが多い。この様な人は大抵、自分の頑固さが認められないと嘆き、成果が上がっていない事にも気が付かず、原因を自分以外に転嫁していくようである。相手の心に寄り添い、その人の立場で言動をコントロールすれば、その様なことは起こらないと思う。

「自己(国)中心」の風潮が世界的にはどこまであるかはあるが、個人がすぐ隣の人の心を想像し、思いやりを持って接する事が連鎖し、相手の心に寄り添うことがグローバルな流れになっていくことを願ってやまない。

修学旅行の思い出 その①

6年生は10月20日と修学旅行です。子ども達から真剣さと楽しみにしているという気持ち伝わってきます。学びの多い行事にしたいものです。立場上「修学旅行は学習です。」とお話をしていますが、とはいえ「思い出づくり」の側面もあります。私も修学旅行の思い出があります。少しお話してみよう。

昭和33年の確か秋だったと思います。熊本市内を出発して我が長洲港へ。そして多比良港に渡り、当時、そこから「田嶋へ」。雲仙普賢岳はまだ噴火前です。その後、長崎水族館に行ってきたことを思い出します。この水族館、今はありません。教師となつて一度だけこの水族館に行きましたが、随分昔になつていたので覚えていません。

その後、長崎市内へと向かつたのですが、初日は学習の側面がとて強かったです。平和公園、原爆資料館。当時の原爆資料館は建て替わったものの、子供心に少し怖い印象を持ちました。強く「戦争はいけない」と思った経験でした。宿泊は部屋から長崎市内の夜景が見える施設だったので、初めて見る夜景に感動し、それが影響したのか、学生時代はバイクで何度も行ったことを思い出します。

2日目は、大浦天主堂やクラバー園に行きました。ここでも初めて目にする教会のステンドグラスや洋館群に、「外国ってこんななんだ」と憧れに似た心情が湧いた場面でした。その後、大浦天主堂の近くのお店で買い物済ませたような気がします。お小遣いは確か2000円だったと思います。何でも言えない船の置物やキーホルダーを買ったような...

修学旅行でインパクトがあったのは、仲の良い友達が好きで女の子にあげるんだと言って、ハート形のキーホルダーを買っていたことです。これには私達の様な幼い少年達は変に興奮して、その友達に「誰にあげるんだ?」とこつこつ聞いたものでした。こうして、少しずつ思春期に入り込んでいき、背伸びをしたり、打ちのめされたりしながら、精神的に大人になつていくのでしようね。

シリーズ「自分を語る」#43

豊島西小2年目、5年生担任を仰せつかりました。初任者研修をまよもよに受けていない私はとにかく情報収集の毎日で、期待と不安が入り混じった毎日でした。その年の初任者研修に研修を受けさせて頂いたのもありました。なごり構わすという言葉がびつたりの毎日です。「初めて学ぶ」「課題」「主体的な学習」「訳の解らない言葉がたぐや出てきて、自分のレベルの低さに自尊心もかなり低かったと記憶しています。」という後悔は...。とか「俺は入院していたから...」とか、色々な言い訳をして、自分を繕っていました。今考えれば情けない状態がはらうく続いていたのでしよう。

そんな中にも、子ども達は今より私について来てくれました。当時の教員達はこんな話をしていました。「澤田先生は怖いけど、おもしろい。」。あるいは、「怖いけど、変」私も怖いばかりでは面白くないだろうというところ、頑固さを褒め、できたらしみの時間を提供し、次のステップへ進んでいく。そのステップはスモールステップの連続で常に主体的に克服させる課題を連続させ、成功体験を積み重ねることに、モチベーションアップを狙っていました。たまにはフライングを認めるが、十分な声掛けをし、更なるモチベーションアップを狙いました。これがまた成功し、多くのことに挑戦し、乗り越えていくことに喜びを感じる集団へと変貌していききました。そして、私が担任時代に続けていた一つの取組にたどり着きます。

豊島西小学校での1年目に感じたことがあります。私だから感じるのだたのかもしれない。それは、子ども達の「やる気の低さ」でした。豊島原での「生きる」ことに必死な子ども達を見てきているので、児童のそのような美態が私の目には異常に見えたのです。1年目は特別支援学級の立ち上げに専念しながらも、交流学級の子ども達と何かできないかと常に考えていました。ただ、何かをしようにも、経済的にも余裕がありませんでした。ぼんやり考えていたのが、きつさや辛さの克服を伴う、長い遠征でした。

1年目の夏休み、早朝から正午にかけて、少し長めの遠征を企画し、保護者の皆さんと協力して、1.2kmの遠征をしました。夏でしたので、「涼しさを感じよう」という視点でコースを考えたところ、熊本県から西原町の「日系の滝」を経由し、河原小学校までのコースを歩きました。当時この計画を保護者に提案したところ、「なぜ、夏の暑い時期に1.2kmなの?」とか「無駄ではないか?」とか「なぜそんなきついことをわざわざ...?」というような意見が多数聞かれました。若かった私はそれこそただなあ。「か」と思いつく、それでも「何かしなければ」という気持ちで、「希望者の参加ですから」「保護者に理解を求め実施しました。計画段階では校長先生もかなり心配されましたが、OKを頂きました。改めて考えてみると、この時の自分の熱量は大したものだと思います。新しい事への挑戦は莫大なエネルギーを費やすと共にストレスも感じますし、それを跳ね返すことも必要ですからね。(つ)(つ)